

アメリカ留學生活

2020. 6. 1 大神訓章

1990～1991年アメリカロサンゼルスで文科省在外研究員として1年間の留學生活を送った。丁度30年前のこと、41歳前厄の年である。妻典子、長女雅子（小学5年）、次女雄子（小学2年）の家族と共に渡米し、大神家にとって、それは意義あるアメリカ生活になった。

そこで、30年経った今、アメリカでの留學生活について思い出しながら触れてみた。旅行雑誌のアメリカ紹介、投稿者のアメリカ雑感、在外研究員の欄外投稿の域を出ない。

1. はじめに

今でこそ、多くの情報が瞬時に入る。ITがこれ程までに進歩して、しかも異国の地で生活しようがあらゆる面で便利になり、無理なく、無駄なく準備から実際の生活まで効率良くできる。しかし、当時はトライ&エラーばかり。無駄金と余分なエネルギーを随分費やした。

具体的には、事前に、文科省に渡航計画・研究計画書提出しなければならないが、それに必要な受け入れ大学(UCLA、コロラド大、シラキュース大)からの招聘状・許可書の取得にひと苦労。併せて、家族パスポート及びアメリカ大使館からのビザ取得(J1&F1)をとらなければならない。生活費は、大金なので持参することはできず、電子送金しか術はなく、山形銀行と事前交渉。渡米後は、まず、ロサンゼルス銀行で個人口座を開設し、山銀から送金(手数料高額)してもらおう。当時の為替レートは、1\$148～152円。とても高かった。

次に、アパート探し。日本の様な不動産はなく、環境の良い物件(治安良く且つUCLA近く)を見つけてはフロント交渉。決まれば電気・水道の手続き。車の免許証取得(10\$で筆記実技一発試験)。車の購入(それまではレンタカー)。家具はレンタルするが、1カ月で解約し、日曜バザーで買い直す。無駄金・浪費。加えて、生活用品・備品を購入する。

続いて、子供達が入学する現地校を探し、入学手続き(9月6日入学式・始業式)に入るが、入学には「かかり付け医」の承諾書と予防接種の証明書が必要(母子手帳は役立たず)になる。病院での予防接種は高額(全ての医療費)なことから保健所を探し、保健所で1回(半日)に両腕に4本に注射と2回の飲み薬のワクチン接種。それにはびっくり。入学手続きは、直接学校で、しかも校長の一存で即決、ロス市役所や教育委員会の手続きはいらない。多民族の大都市ゆえのことであろうか至極簡素。いざロス生活・学校生活が始まるとまたまた驚くことばかり。

それに、実は、ロス到着の翌日から5泊6日でUCLAサマーキャンプがロス郊外であり、ヘッドコーチからの指示もあって自分はそのキャンプに合流する。その間、家族はホテルに缶詰状態。落ち着いて生活できたのが1週間後に

なった。頼る人がいない。自力（未熟な英語力）で悪戦苦闘しながら何とか・・・父親の存在を示し（?）、家族の絆がより強固になったのもこのアメリカ生活があったからこそだと思う。



アパート



アパート屋上プール



アパート前公園



アパートリビング

2. 大学

留学先大学である UCLA（カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校）は、学生数 45,000 人の総合大規模大学であり、ノーベル賞 13 人を輩出している偏差値の高い全米有名校のひとつである。また、スポーツも盛んで、器械体操や陸上競技等のオリンピック・メダリストを多数送り出しでいる。

バスケットボールチームは、1967～73 年の 7 連覇を含む合計 11 回の NCAA トーナメント制覇を誇る全米屈指の超名門チームであり、中でも、ジョン・ウッデンヘッドコーチは、NCAA 全米大学選手権大会 10 回の優勝、88 連勝、シーズン無敗 4 回の大記録を持ち、「バスケットボールの神様」と世界の多くのバスケットボール指導者から尊敬されている。それは、実績もさることながら、コーチの前に「教育者」であり、教育者の前に「人間として」の高い評価である。2010 年 6 月 99 歳で亡くなったが、お会いしたときは、79 歳の高齢にも拘わらず矍鑠(カクヤク)としていた。

なお、11 回目の優勝(1995 年)は、ジム・ハリックヘッドコーチが成し遂げ、自分の留学は、このジム・ハリックに大変お世話になった。ハリックは、練習スタート時には輪になって、今日の練習の流れ、ポイント、フォーメーションを話す但其後に、必ず毎回 3 分間スピーチをする。その内容は、セルフイッシュとは、忍耐とは、情熱とは、感謝とは、チームワークとは、ドラッグとは、自己犠牲とは、学習とは・・・等々「プレーヤーの前に学生たれ」の本質論を説いている。



ジョン・ウッデン



ジム・ハリック

おりしも、1990～91年シーズンは、バスケットボール生誕100年の年であり、全米各地で100年祭を祝うイベントがUSAバスケットボール及び全米大学体育連盟(NCAA)主催で開催された。自分たちも幾つかのイベントに参加できたことはとても記念になった。

因みに、バスケットボールは、1891年12月21日(月)11時30分に初の歴史的ゲームが行われた。生誕地は、マサチューセツ州スプリングフィールドであり、親権者は、ジェームス・ネイスミスである。



ポーリーパビリオン(UCLAアリーナ)



ネイスミス



初期のバスケットボール

3. 子供の学校

2人の子供は、現地の小学校(ロサンゼルス市立フェアバーンアベニュースクール)で学んだ。最初はもちろん英語は話せなかったが、3ヶ月で少し、半年で何とか、1年ではだいぶ分かるようになっていた。もう1年あればすっかりマスターするだろうと思われ、残念ながら、覚えた頃に帰国しなければならなかった。

学校生活は自由があった。ひとつは、基本的な時間割やカリキュラムはあるが、担任の先生の教科指導が自由に裁量に任されていることには驚いた。例え

ば、ある教科が本時の狙いとする段階まで到達すれば、その授業内であっても次の教科に入り、反面、教科の進捗が遅れていれば、少し時間を延長してでも次の時間割（教科）に組み込む。また、昼食はお弁当であるが、お金を払えば、校内のカフェテラスで食べることもできる。小学1年生も個人で対応していた。娘達もワンコイン（25セント）で好きなものが自由に選択して食べられるだけに喜んでカフェテラスで食べていたようである。ある日、娘のためにさよならパーティをしてもらったが、我々が顔を出すと、すぐに授業を切り上げて、持参した日本食（手作り寿司）でのパーティが始まった。更に、日本では考えられないが、親の授業ボランティアが認められている。実際、母親典子が何度か授業に出て、子供達のヘルプをした。特に、数学の授業には現地の生徒達にもヘルプができボランティアのし甲斐があったようである。



数学授業



母親ボランティア



体育授業

4. バスケットボール

アパート前の公園にバスケットボールコートがあった。自由に使える。休日になるとストリートバスケットの始まりである。娘もよく遊んだ。公園を挟んだ向かい側に、ロサンゼルス市レクリエーションセンターがあり、バスケットシーズンが始まった10月からは年齢別週2回20回コースのプログラムに入った。バスケットボールの始まり、8歳小学2年生のときである。スキルの上達を狙いにするもののどちらかといえば躰（しつけ）、マナー、ルール理解に重きをおいて指導していたように思う。コース後半にはゲームをしたが勝負を競うのではなく楽しくゲームができるようにとの配慮があった。

本格的なシーズンに入ると幾つかのリーグ戦が各地で始まった。娘達は日系の方から誘われウエストロサンゼルス日系チーム（3世代）に入り、週1回の練習と週末のリーグ戦に参加した。自分も送迎しながら練習、ゲームを見て、とても勉強になった。雄子の日系チームの子供達との関わりも「大きくなったらWNBAでアメリカに戻るから」と約束するほど濃くなっていた。実際、約20年後にその約束を果たすことができ、日系の人達から驚きもされ喜んでもらったことはとても嬉しかった。

また、自分がUCLAバスケットボールチームに帯同していることから、ホームゲームは、家族揃って応援に駆けつけ、熱狂ぶりを肌で感じた。学生応援の異常なほどの盛り上がり興奮したものである。さらに、NBAレイカーズとクリッパーズの本拠地（当時はフォーラム）でのゲームも何度も観戦した。雄子にとっては、この刺激がのちの本人のバスケットボールに大きな影響をもたら

したことを考えればいいタイミングで留学できたとありがたく思う。



アパート前公園



バスケットボール教室



日系チーム

5. 友人

日系チームでお世話になった大原さんご夫妻には現在も繋がりをもち、渡米の折には必ず会っている。その大原さんを介して仁田尾さん、そして鹿児島県人会、広島県人会の何人かの人達とも親しくしていただいた。その人達は、戦後開拓人として親に連れられて海を渡った日系2世であり、強烈な人種差別にあったとの苦労話を聞かされときは涙した。現在は3世、4世の世代になっていて、この3世4世の人達は日本語は全く話せない。

チュニジア人のアニスとモンデールとも親しくなった。アテネオリンピックに娘が出場した際には、直前にチュニジアを訪ね親交を重ねた。アニスはUCLA工学部大学院に通う優秀なチュニジア国費留学生であり、その友人であるモンデールはバスケットボールを短期に勉強に来ていたのである。フランス語が母国語だけに似通っている英語は流暢に話せる。UCLAでは随分助けられた。

ゴルフを通して親しくなったお爺ちゃん達がいる。その中のネイツアとは自宅に呼ばれたり、アパートに招待したりと親しくお付き合いをした。当時で70歳の高齢だったただけにもうお会いすることもできない。



ネイツア夫妻



アニス&モンデール&その友人

6. 英会話

バスケットボールオフィスは、午後2時にオープンする。それまではときどき日の出とともにひとり歩きゴルフ。同じくひとりで来た人達が4人揃えば随時スタートする。この機会が随分英会話の勉強になった。そして、子供が朝通学する頃には帰宅し、車で送る。その後、午前中は、UCLA 留学生センターで無料の英会話教室。午後は、練習に出て、夜は、サンタモニカ大学の無料夜間英会話教室に通う。ロスには、メキシカンが多く社会貢献のためのこのような教室が探せば幾つもある。また、UCLA 主催のノンクレジットの有料20回コースの英会話教室にも通った。この1年間は気合いが入った。しかし、すでにこのときから30年。英語の読み書きは論文作成で必要だったが、会話をする機会はほとんどなかった。退職後、台湾、マレーシアと関わりを持って、今は、再チャレンジしているところだが・・・

7. 大学訪問と観光

8月1日にロサンゼルスに入国した以降、帰国するまで全米を車で駆け巡った。最初に訪ねたのがサンフランシスコ、スタンフォード大、ヨセミテパーク。ロスでの生活中は、日帰りできるサンディエゴ、そして、メキシコティファナ。バスケットボールシーズン中は、UNLV（ネバダラスベガス大が全米ランキング1位）の練習とゲームを見学に来ラスベガスに何度か通った。ヘッドコーチターカニアンや日本通のロン・アダムスにも会えた。ラスベガスから遠くないグランドキャニオンの壮大さは鮮明に記憶に残っている。1929年の世界大恐慌の救済になった世界最大の水量のフーバーダム、友人のいるパームスプリングスにも行った。

留学後半は、デンバーのコロラド大、バッファローからナイアガラの滝。オーランドにあるウォルトディズニーワールドリゾート。続いて、ローリーのデューク大とノースカロライナ大、ニューヨークに入ってシラキュース大、フィラデルフィアにあるテンプル大を訪問した。中でも、バスケットボールの強豪チームデューク大ではコーチK、マイケル・ジョーダン出身であるノースカロライナ大では、ディーン・スミスにお会いできたことは感激すると共に貴重な経験であった。最後には、フロリダマイアミ、最南端のキーウエストにまで足を伸ばした。まだ見えていない名所や訪問していない有名大学が多々あるが、地域的には全米をほとんど網羅したことになる。



コーチK



ディーン・スミス



ラリー・ジョンソン



S・オーグモン



ゴールドゲートブリッジ



ヨセミテ



グランドキャニオン



ナイアガラの滝

8. おわりに

留学とは、自国以外の国に在留して学術・技芸を学ぶこと、をいう。3ヶ月以内なら短期留学、それ以上は長期留学である。自分は、UCLA という全米の名門大学・名門チームで長期留学ながら、自問自答すると・・・学術は学んでこなかった。では技芸を学んだのか。いや学んでいない。となると、コーチの生業は、留学してまで、海外のチームから、また、コーチ達から何を学ぶのか。

UCLA チームの練習には毎回参加した。練習内容は、ファイルいっぱいを持ち帰ってきた。システム・フォーメーションは、映像でもらってきた。ミーティングにも参加した。しかし、コーチ留学をした手前、しかも、今回のテーマは「アメリカ留學生活」である。学んだことを記そうとしたが・・・なかなか出てこない。思い出せない。もちろん研究報告書は文科省に提出している。

UCLA の選手達は、授業にしっかり出ている。試験勉強もしている。ビッグゲームが週末にあっても授業優先、試験優先である。選手がどうしても授業内容が理解できないなら、その選手にチューター（家庭教師）を体育局（チーム）がつける。大学あげて、チーム一体になって厳しく対応している。それは評定が2.5以下ならチームに帯同できなくなり、また、スカラシップ（奨学金）が剥奪されるからである。すると、退部・退学が余儀なくされる。とりわけ、UCLA のようにディビジョン1に位置する大学は、総じてこのような NCAA ルールの中で部活動している。

意外であった。学んだことはこのことなのか。「文武両道」は、古くからの格言であるが、UCLA の選手達から学ぶとは思ってもよらない。優秀選手は、NBA からドラフトにかかればもちろん NBA に行く。それが選手の夢。でも多くの選手は叶わない。ほとんどの選手は弁護士、起業家等、他の職種に就く。幸いにも NBA 選手になれたとしても引退後は何らかの職に就く。選手としてバスケットボールを激しく求めながらその準備をしていることを学んだのである。それはまさしく学生の本分であり、このことがジョン・ウッデンから学ぶ脈略と受け継がれる教えである。UCLA の伝統はこのようなかかげがえのない学びに依るものであると考える。

思い出しながらの走り書きには取り留めがない。どうしても散文的になってしまう。